

# 治療過程としてのカウンセリング における人格変容の研究 (2)

岸 田 博

## I はじめに

ロジャース (Rogers, C. R.) は、カウンセリング場面で、カウンセラーとクライアントとの関係は、もしある一定の条件が存在する場合にある定まった結果が起こってくるならば、これは函数として表わされると考え、これをカウンセリングにおける過程方程式 (Process Equation) というものに纏めた。そしてその左辺をカウンセラー側の条件とし、その右辺を生起するクライアントの人格変容の程度とした。これらは詳しくは原著 (参考文献 7, 8) に触れてあるので略すが、クライアントの変容過程すなわち右辺が今ここで考えられるべき問題なのである。ロジャースはこの変容過程を測定するためにその尺度 (過程尺度=Process Scale) を作った。この詳細については飯塚銀次が学生相談研究第 5 号に発表しているが、ここへ至る発展の重要な契機がロジャース、ウォーカー、ラヴレン等によって「心理療法過程の変化を測定する尺度の発展」(Development of a Scale to Measure Process Changes in Psychotherapy) という題の下に 1960 年に発表されている。即ちこの研究を過程尺度の展開、あるいはその展開過程の基本的な礎石としての研究と考えることが可能なのである。本研究はこの「心理療法過程の変化を測定する尺度の発展」で述べてあるクライアントの心の動きやその過程を客観的に評定するために、この方法に造詣深い日本人のカウンセラーが日本人のクライアントに対して行なった事例を使用して、その評定値の信頼性と妥当性を追試の形で検証しようとするものである。

## II 研究方法

ロジャースは、「心理療法過程の変化を測定する尺度の発展」の中で以下のごとき方法を使用している。彼は一般的連続線の図式を (日本語で過程尺度表と飯塚が名付け呼んでいるもの) 作成した。Table 1 がその主旨に沿って飯塚が編じたものである。この尺度を過用する資料としての事例は、成功例 3 例 (母親 C, 大学生 A, 母親 B) と、失敗例 3 例 (中学生 A, 母親 D, 母親 F) であった。また治療者は、来談者中心療法の経験豊富な、この療法それ自体についても造詣の深いカウンセラーであり、カウンセラー側の条件は十分満されているものと判定された。妥当なものとして選出された 6 事例のそれぞれから面接記録の 1 頁ずつ 4 枚を系統的に選びだした。抽出方法としては、それぞれの初期の面接から 2 頁の資料を、後期の面接から 2 頁の資料をそれぞれ面接の進行度、(面接の初めか、終わりか、中程か) に関する手掛りが全くないような箇所を選択してプリントした。原則としてはロジャースに習ってなるべく初期面接は第 2 回目と第 3 回目を、後期面接は終了前 2 回目と 3 回目を取り出した。ただ残念なことに、これらの資料は既に他の目的遂行のために使用することを決めていたため、全く無差別に資料を配列することが出来なかった

Table 1. カウ ン セ リ ン グ

ストランド	過 程		
	1	2	3
1. 感情の個人的意味 FPM	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の内部感情を意識しないから話題の中にはんとの気持ちや気分がのっていない。</li> <li>感情は遠いもの、過去のもの離れたものとして述べる。①</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情は時に意識されるが、外部のもの、過去の対象として非人称的に述べる。</li> <li>自分の感情はなるべくさけるように、自己と無関係に述べる。⑧</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情は過去でも私が出た個人的意味が次第に密着してくる。</li> <li>感情を表現した後はほっとした気持ち、滞りがちなようすがある。⑮</li> </ul>
2. 体験過程の様式 EXP	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験過程（体験）から遠く離れて直接的な気持ちを述べたりしない。</li> <li>問題について外部から眺めた過去を語るにすぎない。②</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在の事象は過去形により規定されたものとして述べ自己との関係に思い及ばない。</li> <li>問題には極端な合理化を用いて自己を防衛し直接に経験に近づこうとしない。⑨</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験は過去の再経験として報告的に述べるが、まだ直接的、現在のではない。⑯</li> </ul>
3. 不一致の度合 INC	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験と意識との間に大きい矛盾があるが一方的だから気付かないし、知らずにいる。</li> <li>これは観察者には一方的だからとみられる。③</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己についての発言に、矛盾があっても全く意識していない。⑩</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験の中の矛盾に気付くが経験と自己(表明)との不一致がまだ十分反省されていない。⑰</li> </ul>
4. 自己の伝達 SEL	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己を伝達しながらぬし、話は不馴れなどと述べたりする。</li> <li>問題に無関係な世間話をしたりする。④</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題に触れないで学校・家庭・遺伝等の非自己的課題について述べる。</li> <li>自己の外部からの評価を気にする。⑪</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他人の中に反映された自己の過去を客観的に述べたり。</li> <li>自己及び自己に関係した活動を客体的に表現したりする。(客体的自己) ⑱</li> </ul>
5. 自己構成概念 PC	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己を頑固に信じ、絶対的事実ときめつけている。</li> <li>価値判断は絶対的未分化でおおまかである。⑤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の考えを固守し変えようとしめない。</li> <li>自己および生活は外的条件により規定され関与できない。⑫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己はまだ固いが、時に構成に気づき、時に過去の自己の構成の妥当性に疑問を抱いたりする。⑲</li> </ul>
6. 問題関係 PRB	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題意識や治療の自覚がない。</li> <li>困った問題はないし、大丈夫で健康で変容の必要がない。⑥</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題は訴えるが、それは外部に起り、感情的に意識したりし、責任を感じていない。⑬</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題は外部より自己の内部にありと気づくが、感情的に十分意識していない。⑳</li> </ul>
7. 対人関係 REL	<ul style="list-style-type: none"> <li>カウンセラーとの接近をさけたがる。</li> <li>カウンセラーは治療者、解釈者と思っている。⑦</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何か話さねばならぬと思うが、自ら質問することを恐れている。</li> <li>相談室を自由の場と考えない。⑭</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カウンセラーの信頼や受容が高まり、発言が多くなる。㉑</li> </ul>

し、また同様に、どこらへんかということが判明できなくとも、第何回目位かということが判明するような配列法をとっていた。その他の点については取り出した資料に何ら欠陥はない。このようにして1事例あたり4枚、6事例で合計24枚の面接単位 (Interview

の過程尺度 (1969)

段	階		
4	5	6	7
<ul style="list-style-type: none"> <li>感情は自己に密着して現在の対象として自由に述べられる。</li> <li>強い感情は時に不信や恐れを抱いたり、あるいは意欲を突き破る形で述べられる。 ⑳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情は心中に起るや直ちに自由に述べられ即時的 (今ここで) に経験され受容される。</li> <li>感情は瞬時に経験されると泡立ち滲み出る。 ㉑</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>以前意識されなかった新しい積極的な感情が経験され受容される。そこには否定、抵抗、恐希がない。 ㉒</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情の流れを体験する過程の中に生き、体験は照合枠として深い意識にみちびく。 ㉓</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>何か体験しているいろいろのことを漠然と不本意に述べる。内的準拠枠が (体験の意味)、不明確で混乱している時に、厄介に思われる。</li> <li>経験は過去に縛られること少なく遅延なしに起る。 ㉔</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情は即時的に経験され表明され、直接的に現在へ動き出す。</li> <li>体験の中の準拠により生きる可能性を感じるが、明確でないから時々恐怖疑惑が起り易い。 ㉕</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>以前否定された感情は直接に経験され受容 (肯定) される。</li> <li>照合枠は現在の自己になっていく。体験は鮮明で劇的で生理的解放がみられる。 ㉖</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>変化する体験の流れの中に快く生き、経験の意味照合枠を信じ、最高の指標としようとする。 ㉗</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>体験上の矛盾が明白に実感される。</li> <li>現在の自己と以前の自己の不一致がわかる。</li> <li>経験の分化に伴い、象徴化の正確を求める。 ㉘</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>矛盾は人格の異った側面や水準による態度として認識される。</li> <li>古い自己と新しい自己の対比が生き生きと経験される。 ㉙</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己一致の中に自己不一致が消えてゆくのが目立つ。</li> <li>体験を十分に生きる瞬間において感情の象徴化の不正確さに気づくと一致をもたらす。 ㉚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験の意味の象徴化・概念化が正確となるにつれて、不一致は最少限に、また一時的になる。 ㉛</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>自己に関連した現在の種々の感情を述べる。</li> <li>過去を述べても現在の処理にとりくむ。</li> <li>体験により直接的より集中的となり、自己発見につとめる。 ㉜</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の現在の感情を自由に表明し受容し、感情そのもの即ち真の自己になりたいと願う。</li> <li>客体的自己の知覚が少なくなる。 ㉝</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己は感情、経験の過程の中に存在し、体験過程そのものである。</li> <li>自己意識は反射的で、対象として強く意識しない。(主體的自己) ㉞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己は知覚の対象よりも確信をもって感じとられるもので、豊かに変化する体験の反射意識である。(再帰的自己) ㉟</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>自己は融通性をもちはじめ、体験は絶対でなく、常に妥当しないことに気付き疑ったりする。 ㊱</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己は柔軟性をまし、自己について新しい発見や疑問をもったりする。</li> <li>自分の中で自由な対話が起り、内的交通が改善される。 ㊲</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>不一致の解消で自己の変容することを生き生き体験する。</li> <li>これまで安定した照合枠が解放された時に不安を感じる。 ㊳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己即ち体験の構成は常に融通的試験的に行なわれ、より深い体験に照合して再検討、再構成される。 ㊴</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>問題に対する自己の責任を認めたり、自己が問題の原因であると感ずるがまた動揺する。 ㊵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題に対する自己の原因を気にし、明確に責任があると感ずる。 ㊶</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題のある面を生き生き経験すると問題への生き方が関心となる。</li> <li>問題の話が少なくなり、自己のあり方、生き方が焦点となる。 ㊷</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の新しい生き方つ即ち体験が深まるにがれて計画や行動の新しい在り方が効果的になる。 ㊸</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>両者の親密さを心配し乍らも感情的水準の相互関係を保つように試みる。 ㊹</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人間関係が感情水準で行なわれる。感情が通じ合い、気持を同じくすることができる。 ㊺</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カウンセラーが自己を受容することを信じ、カウンセラーとの関係で真の自己となることに努める。 ㊻</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の直接的なありのままの体験にもとづいて、誰とでも自由卒直な関係を保とうとする。 ㊼</li> </ul>

C. Rogers 著 使東 博 訳 飯塚銀次 編

Unit) ができあがったのである。2人の評定者は、評定に必要な弁別力を習得するため、サンプル事例を使用して数回訓練を行なった。その後判定者は個々別々に、全く相互間の連絡もなしに尺度表に示されてある要素のみに従って、クライアントの言葉の意味を理解

するように試みながら評定を行なった。判定の正確さをより高めるために出来るだけ各ストランズ毎に判定を行なうようにし、その結果を平均するという方法をとった。また、各段階を更に 10 等分して採点した。それ故、各判定者はそれぞれ 70 点法を用いて判定したことになる。これで、絶対的、総合的な段階評定が可能になったと考えられる。また各単位はその最終評定値によって過程の連続線上どこに位置するかが判明できるように、それぞれが独立して順位評定が行なわれた。中には何単位かが同じ評定になったためどうしても順位がうまくつかなかったものもある。この場合には、基本に立ちかえって、再度評定を行なった。それから、またロジャースに習って、この各単位をそれぞれ高 (6~7 段

### Ⅲ 結 果

信頼性 Table 1 を基準に 70 点尺度を使用して、評定者 I と II が独立して 24 の単位

Table 2-1 評定値の信頼度

事例名	判定	面接回数	評定回数	評定者 I	評定者 II	階 級 差	
						ナ	シ 階 級
1 (母 親 B)	成	10	2	3.7	4.2	○	
			3	3.9	4.5	○	
			8	6.4	6.5	○	
			9	6.4	6.5	○	
4 (大学生 A)	功	8	1	3.2	3.0	○	
			2	3.8	3.5	○	
			7	6.8	6.5	○	
			8	6.9	6.5	○	
7 (母 親 C)	功	4	1	3.5	3.5	○	
			2	4.3	3.5	○	
			3	5.3	4.5	○	
			4	6.0	6.5	○	
2 (中学生 B)	失	10	2	4.5	3.5	○	
			3	5.0	3.7	○	
			7	5.0	5.5	○	
			8	5.5	5.0	○	
6 (母 親 E)	敗	25	2	3.5	3.1	○	
			3	3.5	3.2	○	
			20	4.0	4.5	○	
			25	5.4	5.5	○	
20 (母 親 F)	敗	14	2	3.1	3.5	○	
			3	3.0	3.5	○	
			11	4.8	4.5	○	
			12	4.5	4.3	○	

△  
\*

△: ピアソン: 0.85  $p < .001$

\*: スピアマン: 0.87  $p < .001$



階), 中 (3~5 段階), 低 (1~2 段階) の 3 ブロックに分類した。  
 を評定した結果が Table 2-1 に出ている。上の 3 例が成功例, 下の 3 例が失敗例になっている。評定者 I, II間の相関は 1/10% 水準の危険率で 0.85 (ピアソン) の相関が認められた。各単位の品等づけは 1/10% の危険率で 0.87 (スピアマン) の相関が得られた。  
 Table 2-2 にロジャースのそれとの比較をのせた。評定単位の無差別化の点を除けば, われわれの結果も満足すべき内容を示していると考えてよい。

Table 2-2

	ロジャース等		本 研 究	
	ピアソン (r)	0.83	P<.01	0.85
スピアマン (rho)	0.84	P<.01	0.87	P<.001

本研究において危険率が 1/10% 水準であるということは, 最初の判定時に第何回目の面接内容かが可成り判別が可能になってきたためであると考えられるし, 同様に, 相関内容も多少低下することが考えられるが, 満足すべきのものである。8つずつ, 高, 中, 低の単位について, 評定者間の評定値を比較してみると, ロジャースのいう区分けに従った場合, 100% 正確に一致している。Table 2-1 右端欄にそれが記載されてある。また, 自発的に来談した者, つまり可成り問題意識が内部において高まっている者が全てなため, 低段階 (1 段階目と 2 段階目) に該当する評定値はなく, 全てが中と高の部分に所属している。

Table 2-3 にその詳細が示されてある。

Table 2-3

	ロジャース等	本 研 究
正確な一致	75%	100%
一段階相違	25%	0%
二段階相違	0%	0%

Table 2-4

	ロジャース等		本 研 究	
	評定者 I	評定者 II	評定者 I	評定者 II
低段階	8	8	0	0
中段階	8	8	19	19
高段階	8	8	5	5
合 計	24	24	24	24

また, 高, 中, それぞれに 8 例ずつ入らなかったのものであるが, それがどのような工合になっているかは Table 2-4 に示してある。

本研究で, 段階毎の一致度をみてみた。その詳細がすなわち, 次のごとくになっている。正確に同一段階で一致していたもの, 75%, 1 段階違っていたもの, 20.8%, 2 段階違っていたもの, 5.2% という結果が得られた。

**妥当性** 評定者 I, IIに示されたこの 6 事例が, 他の来談者中心療法に造詣深いカウンセラーに提示され, その品等づけを外部的基準とした。別に評定者 I, IIは 24 単位で品等づけを行なった。それはそれぞれの事例の変化指数 (an index of change) として示されているが, 同一事例についてのそれぞれの判定者の後期面接の過程評定値を加え, ま

Table 3-1

	評 定 者 I				評 定 者 II			
	評 定 値	初・後期 それぞれの 合計値	初・後期 それぞれの 評定値の差	順 位	評 定 値	初・後期 それぞれの 合計値	初・後期 それぞれの 評定値の差	順 位
初 期	3.7 4.9	8.6	4.2	2	4.2 4.5	8.7	4.3	2
後 期	6.4 6.4	12.8			6.5 6.5			

た同様に初期面接の過程評定値を加え、それぞれの事例について後期の合計値と初期の合計値の差を算出した。事例 I について行なった 2 人の評定者の結果からの順位算出過程が Table 3-1 に示されている。

同様の手順をたどって算出された順位が、Table 3-2 に示されてある。

Table 3-2

事 例 名	判 定	外部規準順位	評 I 順位	評 II 順位
4	成	1	1	1
1		2	2	2
7		3	3	3
2	失	4	5	5
6		5	6	4
20	敗	6	4	6

\*                    \*\*                    △

△: rho 0.77,  $p < .05$

\* (外と評 I): rho 0.91,  $p < .01$

\*\* (外と評 II): rho 0.94,  $p < .01$

ロジャースは、2人の評定者の順位評定は全く一致したと述べているが、本研究では全く一致しているわけではなく、5%水準の危険率で 0.77 の相関 (スピアマン) 値が示された。それぞれの評定値と外部規準順位との相関は外部規準と評定者 I との間は 1% 水準の危険率で 0.91 (スピアマン)、同じく評定者 II との間には、1% 水準の危険率で 0.94 (スピアマン) の相関が得られた。ロジャースの結果と比較したのが Table 3-3 である。

Table 3-3 外部的規準と評定値との相関度

	ロジャース等		本 研 究		
	0.89	$P < .02$	外部一評 I	0.91	$P < .01$
外 部一評			外部一評 II	0.94	$P < .01$

この妥当性を検証する他の方法としてロジャースが挙げているものと全く同一の手順を踏んで、成功例の過程尺度との変化と失敗例のそれとを比較してみた。Table 4-1 にその成功例の算出方法が例示されてある。

Table 4-1 評定者 I, II の初期後期の差の平均

事 例 名	評 定 者 I	評 定 者 II	評定者 I + II/2
1	4.2	4.3	4.25
4	6.7	6.5	6.60
7	3.5	4.0	4.87
平 均			4.87

そして、それぞれ事例 1:4.25, 事例 4:6.60, 事例 7:3.75 の差の平均 (評定者, I, II の平均) 値を得ている。これを失敗例についても同様な手順で算出したものが Table 4-2 に示されている。

Table 4-2 評定結果の妥当性

事 例 名	判 定	評定者 I + II/2	事 例 名	判 定	評定者 I + II/2
1	成	4.25	2	失	3.15
4		6.60	6		3.05
7	功	3.75	20	敗	2.50
平 均		4.87	平 均		2.90

△:  $p < .02$

成功例はその平均が 4.87, 失敗例はその平均が 2.90 で 2% 水準の危険率を示した。6 事例の平均値のいずれにも重複がみられず, 事例 4, 事例 1, 事例 7, 事例 2, 事例 6, 事例 20 の順に並んでいる。ロジャースのものと比べると Table 4-3 のごとくになって, それぞれの差は, 成功例 2.94, 失敗例 2.60 という値になりいずれの場合にも本研究の方に人格の変化率が大きいことを示している。

Table 4-3

	順 位	ロジャース等	本 研 究
成	1	2.3	6.60
	2	2.0	4.25
	3	1.5	3.75
功	平 均	1.93	4.87
失	4	1.2	3.15
	5	0.3	3.05
	6	-0.6	2.50
敗	平 均	0.30	2.90

これは成功, 失敗事例とも人格変容がある程度ロジャースの場合よりも顕著にあらわれていることを示していると考えられる。

## IV 要 約

現在、7段階、7ストランズに分割され、評定の指標となっている過程尺度の妥当性と信頼性は既に研究が行なわれ、精度の高いものであることが報告されている。しかし、これは唐突に出現したわけではない。ロジャースはこの尺度表を作成する予備段階として、本研究で追試としてとりあげた研究を行ない、その信頼性と妥当性を十分に検証している。本研究も、飯塚銀次の日本語版にて評定したものがロジャースの直輸入ではなく、日本語化し、それなりに信頼性と妥当性をもったものであることを検証することが必要であったのである。この目的はサンプリングに若干原法と異なる所はあっても、それを補ってあまりある内容で証明されたと考えられる。

これらの結果は、次の事柄を明示している。

1. 外部規準によって変量が違くと判定された6事例から、中期と後期からそれぞれ計24単位の標本が選ばれ、これの判定にこの尺度が使用された。結果はすべての比較においてロジャースの言及しているごとく“高度な信頼性”が得られた。また、変量の順位についても、カウンセリングの成功、不成功に対する外部規準と高い一致を示した。
2. ここから、この尺度が今日ある姿よりももっと進歩した姿を示した暁には、人格変容や治療のみではなく、一般の人々の物の考え方に関する我々の見方、知識に大きな影響を与えるものになるに違いない。

## 引用文献・参考文献

- 1) 飯塚銀次; 1967, Process Scale による治療過程における人格変容の研究 (第2回), 日本応用心理学会第34大会発表論文抄録。
- 2) 飯塚銀次; 1969, カウンセリング過程における人格変容の研究, 東京農業大学一般教育学術集, 第5巻。
- 3) 伊東 博編; カウンセリングの過程; カウンセリング論集第3巻, 第5章, pp. 75~103。
- 4) 伊東 博編; 1964, 「カウンセリングの過程」——カウンセリング論集3巻, 第6章, 誠信書房, pp. 105~116。
- 5) 岸田 博; 1968, カウンセリングにおける人格変容の過程の研究 (日本相談学会第1回大会発表)。
- 6) 岸田 博; 1968, 治療過程としてのカウンセリングにおける人格変容の研究, 相談学研究 Vol. 2, No. 1 pp. 15~25。
- 7) Rogers, C. R. and Rablen, R. A.; A Scale of Process in Psychotherapy; Psychiatric Institute Bulletin, Univ. of Wisconsin; 1958.
- 8) Walker, A. M.; Rablen, R. A.; and Rogers, C. R.; Development of a Scale to Measure Process Changes in Psychotherapy, J. clin. Psychol. 1960; 16, 79~85.